



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

柴田, 一成

CITATION:

柴田, 一成. はじめに. 京都大学大学院理学研究科附属天文台年次報告
2015, 2013年(平成25年): 1-2

ISSUE DATE:

2015-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/218127>

RIGHT:

1 はじめに

2013 年度の最も重要なニュースは、岡山 3.8m 望遠鏡建設のために概算要求で申請していた予算(約 3 億 7 千万円)が補正予算として認められたことです。これでようやく、3.8m 望遠鏡の実現が確かなものとなりました。(2013 年度はドームの予算が認められなかったのですが、この原稿を書いている 2015 年 1 月にドーム予算も 1 年遅れで 2015 年度の当初予算として内示が出ました。これで、ついに望遠鏡とドームの完成の目処がつけました。)

関係の皆さま方には深く感謝申し上げたいと思います。とりわけ、副学長の時代から強くご支援いただいた松本紘前京大総長、理学研究科長の時代からずっと応援いただいた山極壽一京大総長、この 2 年間理学研究科長としてご支援いただいた有賀哲也理学研究科長、そして概算要求書を提出するに当たり大きく貢献いただいた理学研究科と本部の事務部の方々には、深くお礼申し上げたいと思います。

3.8m 望遠鏡は宇宙物理学教室の長田哲也教授と栗田光樹夫准教授を中心に、日本初、世界初の技術を開発しながらの自力建設という驚くべき方式で建設が進められています。定常観測がスタートするまでは、まだまだ多くの困難があるかと思いますが、皆さま方には、今後とも今まで以上のご支援ご協力をいただければ大変幸いです。

概算要求と言えば、天文台の仲間の宇宙総合学研究ユニットの概算要求が認められたのも嬉しいニュースでした。(宇宙ユニットの専任教員の磯部さんと浅井さんには、附属天文台の連携教員を担当していただいています。)宇宙ユニットは 2013 年度の末までという予定で、JAXA・宇宙研の連携部門として運営されていたのですが、この概算要求の内示により宇宙ユニットの存続が確かなものとなりました。関係の皆さまには感謝申し上げます。

2013 年度の附属天文台の研究については、2012 年 5 月に Nature 誌に発表された、「太陽型星におけるスーパーフレア」(Maehara, H. et al.)の研究がさらに大きく発展し、1 年間に 4 篇のレフェリー誌論文が出たことが特筆されます。そのうちの 3 篇は、出版された時点で学部生(4 回生)の 3 人(Shibayama, T., Notsu, Y., Notsu, S.)が筆頭著者でした。普通は 4 回生の卒業研究で論文を書きはじめ、大学院生の M1 になってレフェリー誌論文が出版、というぐらいが最短ですから、かなり珍しいことです。(しかも、柴山君の名前が外国のニュース・メディアに引用されたり、野津湧太君に外国からインタビューの電話がかかって来たのも驚きでした。)彼らは 1 回生のときから天文台の見学会や観望会を熱心に手伝ってくれていたので、「スーパーフレア・クラブ」あるいは「スーパーフレア・自主ゼミ」が自然に始まり、楽しく議論しながら解析をしたのが大きな成果につながったと言えます。まさに京大ならではの自由な自学・自習の研究成果でした。この 3 人は引き続き大学院に進学し、スーパーフレアに関連する様々な学問分野(太陽恒星活動、系外惑星、宇宙生物学、宇宙天気予報など)を開拓しようとしているのも、頼もしい限りです。

2013 年 11 月には高山で第 7 回「ひので」国際会議を開催しました。このときは飛騨天文台スタッフが一本教授を中心に大変頑張ったおかげで、世界中から 240 人以上が集まり(うち、外国人が 142 人)飛騨天文台の研究成果をアピールする良い機会となりました。

2013 年末の時点で、附属天文台の人員は 48 人になります。内訳は常勤職員 7 人 (教員 5 人、技術職員 2 人)、非常勤職員 22 人 (うち PD 研究員 5 人)、大学院生 17 人 (博士 7 人、修士 10 人)、宇宙ユニット教員 2 人です。このメンバーで、2013 年は、査読雑誌論文 38 編 (附属天文台構成員が第 1 著者の論文は 15 編)、国際会議集録論文 5 編、研究会報告 212 編 (うち海外国際会議発表 22 編 (招待 8 編)) の成果をあげました。また、2013 年度には、附属天文台より、修士論文 4 人が生まれ、学部教育でも課題研究 6 人、課題演習 4 人が天文台教員の元で研究・演習を終えました。

アウトリーチ活動も活発に行なわれました。見学件数と見学者数は、飛騨天文台 33 件、780 人、花山天文台 55 件、2400 人、総計 88 件、3180 人にのぼりました。一般向け講演や出前授業も 99 件もありました。

アウトリーチに関して嬉しいニュースもいくつかありました。平成 25 年度の文部科学大臣表彰科学技術分野理解増進部門で附属天文台グループが受賞したのです。タイトルは「大学天文台での宇宙体感イベントによる最先端科学の普及啓発」でした。また、花山天文台は、2013 年 1 月に「京都市民が残したいと思う京都を彩る建物や庭園に選定されました。

これは観望会や見学会における花山天文台職員や NPO 花山星空ネットワークのボランティアのみなさんの献身的な貢献のおかげと言えます。このような京都市民のご支援に感謝するために、2013 年の 9 月 17 日～20 日に特別公開ウィークとして平日の昼間と夕方をオープンし、その週の最後の 9 月 22 日には音楽家の喜多郎さんに来ていただいて野外コンサートを開催しました。共に花山天文台始まって以来の初のイベントでした。また、特別公開には近隣の小学校の生徒が多数見学に訪れたのですが、そのとき京都市立堀川高校の生徒達が見学案内の引率を手伝ってくれました。大変嬉しい出来事でした。花山天文台の応援のために野外コンサートを開いて素晴らしい演奏をしてくださった喜多郎さん御夫妻には心よりお礼申し上げます。また、全面的に応援してくださった京都市の門川大作市長、京都市教育委員会、堀川高校の皆さま方には、深く感謝いたします。

2013 年度は附属天文台全体としては研究も教育・普及も非常に活発に行われ、少ないスタッフ数で世界をリードする成果を挙げていると言えます。しかし、運営費交付金の削減や定員削減により、天文台の運営は困難をきわめています。そこで広く市民の皆さまから寄附を集めるために、天文台基金を立ち上げることになりました (2013 年 12 月教授会決定。ホームページによる公表開始は 2014 年 3 月)。<http://www.kwasan.kyoto-u.ac.jp/kikin/>
今後とも、これまで以上に京大天文台をご支援いただければ大変幸いです。

平成 27 年 (2015 年) 2 月 8 日
京都大学大学院理学研究科
附属天文台台長 柴田一成